

Mr. Pim Passes By と *The Boy Comes Home*

— A. A. ミルンの戦後体験 —

田 中 杏 樹

序

A.A. ミルン (1882-1956) が第一次世界大戦の従軍中から構想をもっていた戯曲 *Mr. Pim Passes By* の舞台は、終戦からおよそ一年後の1920年1月4日、ロンドンで初日を迎えた。ミルン戯曲の中で最もロングランを続け、成功を収めたこの戯曲は、劇作家ミルンの名を確立させた作品である。ミルンがアマチュア軍人時代に執筆した戯曲は全部で6作品 *Once on a Time* (1917), *Wurzel-Flummery* (1917), *Make Believe* (1918), *Belinda* (1918), *The Boy Comes Home* (1918), *Lucky One* (1919), 終戦直後の同時期に執筆した戯曲は4作品, *Mr. Pim Passes By* (1920), *Great Broxopp* (1921), *The Truth about Blayds* (1921), *The Dover Road* (1921) である。これらのミルン戯曲は、時代的背景を意識して読むと、作品のテーマやプロットに、ミルンの戦争・戦後体験の影響を受けた、彼の劇作法や工夫をみつけることができる。筆者は、作品に内在する、戦争に対するミルンの心的スタンスに、舞台関係者と観客をひきつける要素があり、その心的スタンスを考察することで、ミルン研究を深められると考えた。本論文では、上記の10作品中、大成功を収めた *Mr. Pim Passes By* をこの論文の研究対象の作品として取り上げ、なぜ *Mr. Pim Passes By* がヒットしたのか、作品に内在する要因を考える。

以下の引用は、自叙伝の中で、ミルンが上演の初日に立ち会い、無事に終わった時の様子を描いた箇所である。

I have attended many first nights in the miserable role of author, but never one like that. The house was so delighted to see its loved and lovely Irene back again that in sheer happiness it extended its favour to the play. Call went on continuously, there were continuous cries for 'Speech!'— the author was pushed on and pushed off; and still Dot and Irene were bowing. (*Autobiography* 278)

Mr. Pim Passes By のヒットには、様々な要因が含まれる。戯曲が劇として上演されるまでには、当時の人気女優アイリーン・バンブラ (1872–1949) や敏腕プロデューサー、ドット・ブシコー (1859–1929) の力が加わっており、その上演が作品に与えた影響は大きい。しかし、言い換えれば、彼らの力を引き出す魅力を持っている作品であった、と言う可能性もある。したがって、上演の成功は戯曲に負うところも大きいとも思われる。戯曲にみられるミルンの劇作法を分析することにより、その特徴と魅力を考察する。

この作品は、未婚の若いカップル Brian と Dinah と中年カップル George と Olivia が、Marden 家の客間を舞台に、それぞれの問題を解決し、ゴールインするという喜劇である。二組のカップルを幸せへと導くエンジェルは、訪問者 Mr. Pim である。当初 Brian と Dinah の結婚に難色を示していた George と Olivia であるが、亡くなったはずの Olivia の夫がまだ生きているという Mr. Pim の証言から、問題は、我が身にふりかかってくる。もしも Mr. Pim の言葉が本当であれば、
益 Olivia は重婚の罪に問われることになる。もちろん George と籍を入れることもできなくなる。亡くなったとばかり思っていた人物が、本当は

生きているかもしれない。本来ならば嬉しいはずの話が全く間逆の衝撃を与える。このストーリー展開はとても斬新で、*Mr. Pim Passes By* は人気を博すのである。戦後、多くの人が経験することとなった、消息がとれなくなってしまった身内や大切な人の安否を案じながらも力強く生きるという体験を、一つの題材として作った喜劇である。ストーリー展開を喜劇的に作っていることが、四年間続いた戦争の後、心が明るくなる作品への需要が多かったことを窺わせる。

ミルン戯曲には、*Mr. Pim Passes By* 以上に戦争・戦後体験がふんだんに用いられている作品がある。それは、*The Boy Comes Home* である。この作品は、戦争から帰還した青年 Philip と、彼の叔父 James との対話を主とした一幕劇である。ミルン自身も兵役のために戦地ドバーで過ごした時間があり、そこでは身近な人たちとの死別があった。彼は、*The Boy Comes Home* を通して、戦争によって失われた時間の穴埋め、戦争体験から来るフラッシュバック、戦後の雇用問題、倫理観のゆがみ、死生観など、戦後多くの人が抱えた共通の問題を扱いながら、多感な時期に戦争体験をした青年の戦後体験を描いている。以下の引用は、劇の終盤で、戦争体験を象徴するリボルバーと軍服に言及させることで、Philipの心の変化を表現している場面である。

James: Well now, Philip, what are you going to do, now you've left the Army?

Philip: (promptly) Burn my uniform and sell my revolver.

James: (starting at the word “revolver”) Sell your revolver, eh?

Philip: (surprised) Well, I don't want it now, do I?

(*The Boy Comes Home* 125)

六

上記の対話から読み取れる Philip の心の変化とは、具体的にどうい

うことか。過去から抜け出せずにいるPhilipが今を意識する瞬間を見せられているのが、“Burn my uniform and sell my revolver.”と“ Well, I don't want it now, do I?”という台詞である。この描写からは、戦争という過去を清算し、戦後の、今という現実に向き合う彼の心の変化を読み取ることができる。それと同時に、この対話からは、戦後におけるミルンの心的スタンスも見つけることができる。ミルンは、自叙伝の中でも戦争について以下のように述べている。

I should like to put asterisks here, and then write: 'It was in 1919 that I found myself once again a civilian.' For it makes me almost physically sick to think of that nightmare of mental and moral degradation, the war... It seems impossible to me now that any sensitive man could live through another war. (*Autobiography* 249)

ミルンは、戦争を、精神的・道徳的墮落という悪夢という言葉で表現し、終戦を迎えた年を、軍人から一般市民に戻った時と書いている。そしてまた、細やかな人間が、もう一度あのような戦争を切りぬけることは不可能だろう、とも述べている。

終戦を迎え、平穏な日常を取り戻してもまだなお、心に負った痛手を抱える登場人物達の水面下の心の葛藤を描きながらも、OliviaやPhilipが気持ちを切り替え、過去を清算し、戦後という今を生きようとする様子を明るく描いているところは、当時の観客の共感を得ることができた点であり、その前向きな考え方は、難局をかわしていく機知と発想をみつけることができる点で、現代の読者にとっても意義深いと言える。

ミルンの戦争に対する心的スタンスを意識し、*The Boy Comes Home*と比較しながら、テーマ、プロット、キャラクターという観点からミルンの劇作法を分析することにより、その特徴と魅力を考える。

1. テーマ

Mr. Pim Passes By と The Boy Comes Home に共通するテーマは、「人生の再構築」である。これは、主人公 Olivia や Philip の心の変化に着目し、その変化を追っていくと見つけることができる。結婚や兵役などの進路を決める時には、誰しもそれなりの覚悟や決断を要するものであるが、どんな道であっても、予想を上回る予期もしない出来事は起きるものである。ミルン戯曲の主人公たちも例外なくそのような事態に襲われ、必然的に、人生の再構築を迫られる。ミルンは、登場人物たちが、運命に右往左往しながらも、心を静め明るく人生の再構築をしていく様を生き生きと描いている。

Mr. Pim Passes By の冒頭は、Marden 家の穏やかな日常風景を描写するト書きから始まる。六年前夫を失った Olivia は、George との暮らしをスタートさせていた。

Olivia の過去については、George の姪 Dinah と訪問者 Mr. Pim の会話を通してわかるような作り方をしている。以下は、Olivia の経歴と George と Olivia の馴れ初めについて話している場面である。

Dinah: Mrs. Telworthy—don't say you've forgotten already, just when you were getting so good at names. Mrs. Telworhty. You see, Olivia married the Telworthy man and went to Australia with him, and he drank himself to death out there, and Olivia came home to Engl nad, and met my uncle, and he fell in love with her and proposed to her, and he came into my room that night—I was about fourteen—and turned on the light and said, “Dinah, how would you like to have a beautiful aunt of your very own?” And I said: “Congratulations, George.” That was the first time I

三

called him George. Of course I'd seen it coming for weeks. Telworthy, isn't it funny name?

Pim: Very singular. From Australia, you say?

Dinah: Yes, I always say that he's probably still alive, and will turn up here one morning and annoy George.

(*Mr. Pim Passes By* 201)

夫が行方不明だった Olivia は、ある日タイムズ紙に掲載されていた記事から彼の死と直面し、その死を受け入れ、自分の人生を自分らしく形作っていた。作中では、Olivia が自分自身の運命と向き合い、未来に向けて軌道修正を試みながら、人生を再構築させていく様子を読者に二回見せている。一つ目は、George と穏やかな時間を育んでいるという既成の事実と、Dinah と Mr.Pim の対話を通してわかる Olivia の過去から、読者に想像させることで彼女の人生の再構築を見せている。そしてもう一つは、Mr. Pim の証言から、夫が生きているかもしれないという状況に見舞われた時、George との関係をごどのようにしていくか、彼とディスカッションを続ける場面である。この場面は、舞台上の客間の Olivia と George の対話で直接表現しているため、読者は彼らの台詞を追いながら、その展開に注目する。

以下の引用は、二人がけんかをしているシーンである。もし Olivia の夫の死が誤報で、彼がまだ生きていたら、Olivia はどんな選択をするのか。George と入籍できないばかりか、彼女は重婚の罪にも問われることになる。しかし彼女は、たとえ夫が生きていたとしても、変わらず Marden 家で暮らし続けると言う。

George: You know quite well what I mean. You treat it as an ordinary proposal from a man to a woman who have never been more than acquaintances before. Very well, then.

Will you tell me what you proposal to do, if you decide to—ah—refuse me? You do not suggest that we should go on living together—unmarried?

Olivia: (shocked) Of course not, George! What would the County—I mean Heaven—I mean the Law—I mean, of course not! Besides, it's so unnecessary. If I decide to accept you, of course I shall marry you.

George: Quite so. And if you—ah—decide to refuse me? What will you do?

Olivia: Nothing.

George: Meaning by that?

Olivia: Just that, George. I shall stay here—just as before. I like this house. It wants a little re-decorating, perhaps, but I do like it, George. . . Yes, I shall be quite happy here.

George: I see. You will continue to live down here—in spite of what you said just now about the immorality of it.

Olivia: (surprised) But there's nothing immoral in a widow living along in a big house, with perhaps the niece of a friend of hers staying with her, just to keep her company.

(*Mr. Pim Passes By* 243-244)

この場面以外でも、劇中多くの台詞が George と Olivia のディスカッションに使われている点は、非常に興味深い。なぜならこのディスカッションは、中年カップルのラブシーンだからである。混乱の中にあっても Olivia の過去を受け止めようとする George の懐の深さと、ストレートな意思表示をする Olivia のキュートさは、読者を引き込むにあまりある。

なんとしても結婚したいと突っ走る Brian と Dinah の若々しさにも胸が熱くなるが、一緒にいなかった時間を法律と既成の事実と大人なら

☆

ではの図々しさで乗り越えようとする George と Olivia の会話には、物語を牽引する力がある。

真実は時の娘と言うが、結局は Brian との結婚を反対された Dinah が Mr. Pim に話を持ちかけたことが始まりの話で、やはり夫は他界していたことがわかって、話は一見落ち着く。以下は、Mr. Pim が Olivia に夫が死んでいたことを話すシーンである。無邪気に喜ぶ Olivia の反応に、読者も思わず顔がほころぶことは間違いない。

Olivia: Just a moment, Mr. Pim. Let us have it quite clear this time. You never knew my husband, Jacob Telworthy, you never met him in Australia, you never saw him on the boat, and nothing whatever happened to him at Marseilles. Is that right?

Pim: Yes, yes, that is so.

Olivia: So that, since he was supposed to have died in Australia six years ago, he is presumably still dead?

Pim: Yes, yes, undoubtedly.

Olivia: (holding out her hand with a charming smile) Then good-bye, Mr. Pim, and thank you so much for—all your trouble. (*Mr. Pim Passes By* 246-247)

Mr. Pim の上記の台詞から、George と Olivia の問題は解決する。上記は Olivia が心からほっと肩をなでおろす場面でもある。読者が知りうる限り二回目の「人生の再構築」を迫られた Olivia であるが、Mr. Pim の訪問は、結果的に George との心の絆を強めた。

では、*The Boy Comes Home* からはどんな「人生の再構築」を見ることができだろうか。この作品は、戦地から帰還した主人公 Philip の心の変化を、叔父である James との対話を通して見せている。*Mr.*

Pim Passes By は結婚の問題を扱っているが、*The Boy Comes Home* は仕事の問題を取り上げている。本来ならば将来を見据えて職業を選び、準備期間にあてるべき時間が戦場で使われてしまった青年 Philip は、終戦後、どのように社会復帰するのか。兵士として過ごす時間の中で身につけた過去の規則や習慣についての対話は、戦後の価値観の変化にともない、当時の観客には痛々しく共感と呼んだことだろう。失われた時間は、もちろん、戻すことはできない。過去の記憶が邪魔して、未来に向けてなかなか気持ちが定まらないように描かれている Philip だが、劇の最後に、叔父の誘いに応じることで、明るい未来を予感させる心の変化を見せている。以下の引用からは Philip の心の成長を見ることができる。

James: How would you like to come into the business?

Philip: The jam business? Well, I don't know. You wouldn't want me to salute you in the mornings?

James: My dear, boy, no!

Philip: All right, I'll try it if you like. I don't know if I shall be any good—what do you do?

James: It's your experience in managing and—er—handling men which I hope will be of value.

Philip: Oh, I can do that all right. (Stretching himself luxuriously) Uncle James, do you realize that I'm never going to salute again, or wear a uniform, or get wet—really wet, I mean—or examine men's feet, or stand to attention when I'm spoken to, or—oh, lots more things. And best of all, I'm never going to be frightened again. Have you ever known what it is to be afraid—really afraid?

James: (getting up) All right, we'll try you in the office.

六

I expect you want a holiday first, though.

Philip: (getting up) My dear uncle, this is holiday. Being in London is holiday. Buying an evening paper—wearing a waistcoat again—running after a bus—anything—it's all holiday. (*The Boy Comes Home* 125-126)

働くことができずにいた時間を休日と捉え、解釈によって自分なりに過去を整理整頓し、今ある環境に感謝して、できることからスタートさせていこうとする Philip の姿勢は、一筋縄ではいかない人生の分岐点を明るく照らす。

Mr. Pim Passes By と *The Boy Comes Home* の中で、ミルンが描いた「人生の再構築」は、主人公が今すでにある幸せに深く気づくことで、完成する。

2. プロット

ミルン戯曲の二作品に共通する面白さは、本当は何も起きていない、ということである。*Mr. Pim Passes By* の中で、Olivia の夫はやはり彼女の認識通り既に他界していたし、*The Boy Comes Home* では Philip が James に銃を向けて一瞬緊迫感を持たせるが、それも結局は James の夢であった。本当は何も起きていない登場人物達の日常生活の中に、Mr. Pim や James の夢という仕掛けを加えることで、今すでにある日常を主人公に客観的に再認識させ、彼らの心を一步前に押し出す地点を結びにしている。

しかし、もっと正確に考察するならば、何も起きていないわけではなく、心的ダメージを受けた主人公が、その後の人生の再構築を試みる場面に焦点をあてているのである。では、人生の再構築というテーマをより印象的にみせるために、プロット上では、どのような工夫がなされて

いるだろうか。

ミルンは、*Mr. Pim Passes By* を創作する際、ホラティウスの言葉からヒントを得て、プロットの構成を考えた。以下は、自叙伝からの引用である。

God moves in a mysterious way his wonders to perform, he plants his footsteps on the sea and rides upon the storm. Grand hymn that, why did it suddenly come into my head? And why did I never see before what an absurd non-sequitur it is? I mean the first two lines are all right by themselves, and so are the second two, but they don't mix. In effect he begins by saying that great events from little causes spring, or whatever the line is, and then... It's ironic the way things do happen like that. Or the other way about. Little events from great causes. What's the Latin? Parturiunt montes nascetur ridiculus mus. Is that right, or shouldn't it be a pentameter? The little gods must have fun, deciding what mountains are to be in labour in order that our ridiculous little wishes shall be gratified. (*Autobiography* 302)

プロットの構成は、以下のように順に組み立てていった。まず、大戦という大きな事件の後の市民の家庭生活上の小さな問題から物語を始める。そして、その小さな家庭問題を過去の大きな事件との関連で、突如大きな問題へと変化させる。その大きな問題で混乱や騒動が起きる。大きな問題と思われていたことは結局存在しなかったことを知らせ、騒動は空騒ぎだったということにして終幕させる。それでは、具体的に劇中のト書きや対話を考察しながら、ミルンの工夫を分析していく。

兵

はじめに、*Mr. Pim Passes By* の冒頭のト書きの引用をみてもらい

たい。Olivia は、何か胸がわくわくするようなことはないか、と思えるほど平和な日常を過ごしていた。Olivia が穏やかで幸せそうに登場すればするほど、彼女が自分の過去と丁寧に向き合い、夫の死を乗り越えたことを表現することができる。ここでは、何か胸がわくわくするようなこととして、カーテンをとりつけることを上げている。

Visitors to the house have called the result such different adjectives as “mellow”, “old-fashioned”, “charming”— even “baronial” and “antique”; but nobody ever said it was “exciting”. Sometimes Olivia wants it to be more exciting, and last week she let herself go over some new curtains. At present they are folded up and waiting for her; she still has the rings to put on. It is obvious that the curtains alone will overdo the excitement; they will have to be harmonized with a new carpet and cushions. Olivia has her eye on just the things, but one has to go carefully with George.

(*Mr. Pim Passes By* 199)

彼女は、部屋のインテリアを楽しんでいる。カーテンに合わせて、カーペットやクッションもそろえなければと、頭の中はそのことでいっぱいである。ミルンは、このような日常の些細なワンシーンを使って、多くの人が共感できるような市民の家庭生活上の問題を描いている。冒頭から多くの共感が得られることで、作品世界への誘いに成功していると言える。

この作品における小さな出来事は、カーテンを窓にかけることである。カーテンが無事に窓にかけられるまでに、George と Olivia は、二人の関係が成り立たなくなってしまう Olivia の亡くなったはずの夫がまだ生きているという衝撃的な話を聞かされる。問題解決までのディスカッ

ションの後、小さな出来事であるカーテンは、取り付けられる、という展開である。以下、ミルンが自叙伝の中で述べている引用箇所である。

Here's a woman wants to hang a pair of curtains in her house, but her husband won't let her, and the little gods say, 'All right, darling, you shall hang your curtains,' and then they get into a corner and chuckle together, and then arrange the most frightful shocks for both of them... and up go the curtains. That became a play called *Green Curtains*, until it suddenly occurred to me that a better title would be *Mr. Pim Passes By*. (*Autobiography* 302)

ミルンが *Mr. Pim Passes By* 執筆時にホラティウスの言葉からヒントを得たプロットの構成は、*The Boy Comes Home* にもあてはめることができる。以下の引用は、Philip に銃で撃たれそうになる直前で夢から覚める James を描写したト書きと、その後の James と Philip の対話である。

(James opens his eyes with a start and looks round him in a bewildered way. He rubs his head, takes out his watch and looks at it, and then stares round the room again. The door from the dining-room opens, and Philip comes in with a piece of toast in his hand.)

Philip: (his mouth full) You wanted to see me, Uncle James?

James: (still bewildered) That's all right, my boy, that's all right. What have you been doing?

Philip: (suprised) Breakfast. (Putting the last piece in his

mouth) Rather late, I'm afraid.

James: That's all right. (He laughs awkwardly)

Philip: Anything the matter? You don't look your usual bright self.

James: I—er—seem to have dropped asleep in front of the fire. Most unusual thing for me to have done. Most unusual. (*The Boy Comes Home* 124)

Philipに殺されそうになるという悪夢にうなされる、暖炉の前の転寝から目覚めたJamesは、Philipに対しての気持ちに変化が生まれる。戦場から帰ってきてから、決まって、朝食をとるのが遅い時間だったり、働けずにいたPhilipに対してもどかしさを感じていたが、今まで以上に彼の気持ちに寄り添えるようになる。その結果、Jamesが心配していたPhilipの生きる姿勢に変化が生まれるのである。

ミルンの考えたプロットのように現実の物事は簡単にできているわけではないが、ミルン戯曲とりわけこの二作品に共通するプロットの作り方は、起承転結に強弱をつけていてわかりやすく、劇の最後で心地よく笑顔になれる。

3. キャラクター

*Mr. Pim Passes By*には、舞台には登場しないにもかかわらず強い存在感を表わし、登場人物達を翻弄する人物がいる。それは、Mr. Telworthyである。彼の生死が、主人公の明暗を分けるからである。しかし、より正確に言えばMr. Telworthyの生死の情報はMr. Pimの手中にあり、彼らの将来はその情報の真偽にかかっている。そのことに気づいた時、私達は、劇のタイトルに納得するのである。

ミルンは、人の名前を使って物語を作ること得意としている。たと

えば *Wurzel-Flummery* はオスカー・ワイルド (1854–1900) の *The Importance of Being Earnest* (1895) と同じく名前を扱った典型的な戯曲である。以下の引用は、Mr. Pim が出会ったと言う Mr. Telworthy が、なかなかない名前であるということとその状況から、Olivia の夫なのではないかという疑念を持ち、George と Olivia が青ざめるシーンである。

Mr. Pim: There was a man I used to employ in Sydney some years ago, a bad fellow, I'm afraid, Mrs. Marden, who had been in prison for some kind of fraudulent company—promoting and had taken to drink and—and so on.

Olivia: Yes, yes, I understand.

Mr. Pim: Drinking himself to death I should have said. I gave him at the most another year to live. Yet to my amazement the first person I saw as I stepped on board the boat that brought me to England last week was this fellow. There was no mistaking him. I spoke to him, in fact; we recognized each other.

Olivia: Really?

Mr. Pim: He was traveling steerage; we didn't meet again on board, and as it happened at Marseilles, this poor fellow—er—now what was his name? A very unusual one. Began with a—a T, I think.

Olivia: (with suppressed feeling) Yes, Mr. Pim, yes?

(She puts out a hand to George.)

George: (in an undertone) Nonsense, dear!

Mr. Pim: (triumphantly) I've got it! Telworthy!

Olivia: Telworthy!

George: Good God! (*Mr. Pim Passes By* 217-218)

ここで注目したいのは、ミルンの場面設定の仕方である。Mr. Pim は George と Olivia の二人に対して、同時に話している。つまり、George と Olivia が Mr. Pim の発言する Mr. Telworthy 生存問題の話を、同時に、一緒に受け止めることになる作り方をしているということである。このミルンの場面設定によって、彼が George と Olivia のラブストーリーを誘発していることがわかる。

以下は、Mr. Pim が Mr. Telworthy の名前を思い出したように口にした後の George と Olivia の反応である。

Mr. Pim: (a little surprised at the success of his story)
An unusual name, is it not? Not a name you could forget
when once you had heard it.

Olivia: (with feeling) No, it is not a name you could
forget when once you had heard it.

George: (hastily coming over to Pim) Quite so, Mr. Pim,
a most remarkable name, a most odd story altogether.

(*Mr. Pim Passes By* 218)

Mr. Pim の訪問と、彼の、思いもよらぬ Mr. Telwothy についての話は、部屋のインテリアに夢中だった Olivia の心を奪い、George の Olivia への気持ちを煽らせることなる。まるでプロデューサーのようにキャストの感情を自然と動かしていく Mr. Pim のキャラクターは、*Wurzel-Flummery* で主要人物たちに改名の問題を提起する弁護士 Denis Clifton を彷彿させる。

七 上記の引用は、一幕目で、George と Olivia に、Mr. Telworthy が生きている、という印象を与えた Mr. Pim の発言であるが、以下は二幕

目に Mr. Telworhty は死んでいる、という印象を与える場面である。この場面でも、もちろん George と Olivia は一緒にいて、Mr. Pim から確かな情報を得ようと躍起になるところである。

Mr. Pim: (surprised) Where is he now? But surely I told you? I told you what happened at Marseilles?

George: At Marseilles?

Mr. Pim: Yes, yes, poor fellow, it was most unfortunate. (Quite happy again) You must understand, Lady Marden, that although I had met the poor fellow before in Australia, I was never in any way intimate—

George: (thumping the desk) Where is he now, that's what we want to know?

(Mr. Pim turns to him with a start)

Olivia: Please, Mr. Pim!

Mr. Pim: Where is he now? But—but didn't I tell you of the curious fatality at

Marseilles—poor fellow—the fish bone?

All: Fish-bone?

Mr. Pim: Yes, yes, a herring, I undertand.

Olivia: (understanding first) Do you mean he's dead?

(*Mr. Pim Passes By* 235)

生きているのか、死んでいるのか、Mr. Pim のトリックは George と Olivia だけでなく、読者の心もさらっていく。上記の引用の中で、全員で“Fish-bone?” という台詞がある。このようにして、徐々に盛り上げていくのが、Mr. Pim を動かすミルンのトリックであることは言うまでもない。

と

以下は、劇の最後のシーンのト書きと Mr. Pim の台詞である。結局、Mr. Telworthy は亡くなっていた。今まであった George と Olivia の日常は守られ、また、穏やかな時間へと戻っていく。劇の冒頭のト書きで書かれていたカーテンは、無事に取り付けられる。そんな最後のシーンで、ミルンが Mr. Pim に言わせる台詞から、読者は、オスカー・ワイルドの *The Importance of Being Earnest* が頭をよぎる。

(George hurries in with the steps, and gets to work. There is a great deal of curtain, and for the moment he becomes slightly involved in it. However, by draping it over his head and shoulders, he manages to get successfully up the steps. There we may leave him. But we have not quite finished with Mr. Pim. It is a matter of honour with him now that he should get his little story quite accurate before passing out of the Marden's life for ever. So he comes back for the last time; for the last time we see his head at the window. He whispers to Olivia.)

Mr. Pim: Mrs. Marden! I've just remembered.

His name was Ernest Polwittle—not Henry.

(He goes off happily. A curious family the Mardens. Perhaps somebody else would have committed bigamy if he had not remembered in time that it was Ernest... Ernest... Yes... Now he can go back with an easy conscience to the Trevors.) (*Mr. Pim Passes By* 254)

George と Olivia, そして Brian と Dinah という二組のカップルを幸せへと導く Mr. Pim であるが、彼のキャラクターの中に潜む作家ミルンは、どんな意図を持って Mr. Pim を動かしていたのだろうか。答えは

二つある。一つは、George と Olivia のディスカッションの邪魔をしないこと。なぜなら Mr. Pim はエンジェルだからである。そしてもう一つは、過去を省みさせ、未来へと力強く背中を押す、大人の言葉のトリックが存在するということ。

では、Mr. Pim のキャラクターとミルンの戦後体験はどのような関連性をもっていると言えるだろうか。戦後は、多かれ少なかれ誰もが変化することを余儀なく強いられた。戦争体験という時代的運命を受け入れ、心を成長させ、今ある環境に感謝して、幸せに気づくこと。Mr. Pim のキャラクター作りには、そんな想いが込められている。

結

ミルンの戦争に対する心的スタンスを意識し、*The Boy Comes Home* と比較しながら、テーマ、プロット、キャラクターという観点からミルンの劇作法を分析することにより、その特徴と魅力を考えて。

戦争・戦後体験の影響を受けた、彼の劇作法や工夫を見つけることができるミルン戯曲からは、当時の観客や読者へ共感と前向きな明るさを提供するだけでなく、現代の読者に対しても、価値があると言える。なぜなら、それらの作品は、日常の幸せと難局をかわす工夫をおしえてくれる魅力を持ち合わせているからである。

Works Cited

Primary sources

- Milne, Alan Alexander. *Autobiography*. New York: Dutton, 1939.
- . *First Plays (Wurzel Flummery; The Lucky One; The Boy Comes Home; Belinda; The Red Feathers)*. New York: Alfred A. Knopf, 1922.

- . *Four Plays (To Have The Honour; Belinda; The Dover Road; Mr. Pim Passes By)*. New York: Penguin Books, 1940.
- . *Second Plays (Make-Believe; Mr Pim Passes By; The Camberley Triangle; The Romantic Age; The Stepmother)*. New York: Alfred A. Knopf, 1922.
- . *Three Plays(The Dover Road; The Truth about Blayds; The Great Broxopp)*. New York: G.P.Putnam's Sons, 1922.

Secondary sources

- Haring-Smith, Tori. A. A. *Milne: a Critical bibliography (Garland reference library of the humanities; vol.305)*, New York: Garland Pub, 1982.
- Milne, Alan Alexander. *It's Too Late Now: The Autobiography of a Writer*, London: Methuen, 1939.
- . *Peace with Honour*, London: Methuen&Co. Ltd., 1934.
- Swann, Thomas Burnett. *A. A. Milne*, New York: Twayne Publishers 1971.
- Thwaite, Ann. *A. A. Milne his life*, Gloucestershire: Tempus, 2006.